

都市空間の構想力

空間文化
の博物学

東京

第6回

東京大学都市デザイン研究室



個の側からどのようにしてこの複雑で混沌気味の都市全体にアプローチできるのだろうか。

個と全体

対立が相似か、物語を介したその先の邂逅か

西村幸夫（東京大学教授）

全体の構図を内在させる個

ひとが住んでいないと都市は成立しないのだから、個々の住宅や仕事場などの単体建築物が都市の基本的な構成単位であるということは自明である。

しかし個々の建築物が蟻集しただけでは巨大なゲットーはできて都市は生まれにくい。建築物の集合体が都市となるためには、空間全体が中心と周辺とそれらを結びつけるネットワークによって構造づけられる必要がある。建築物単体という個と都市という全体の間には明らかに質的なジャンプがある。

しかし、考えてみると住宅のような個別の建築物であっても、そこに込められた機能は多様であり、それらを統合してひとつの空間システムを生み出すプロセスには類似のジャンプを経なければならぬというところがいえる。

こうしたことはすでに古くから言われてきた。例えば、「家は小さな都市であり、都市は大きな家である」といった主張である。

今日では一見ありきたりに見える

この表現の真意は、個が全体の相似形であるということにある。たとえば、都市全体が自律的であるように、建築物単体も自律的である。そして建築物単体が自律的であると、建築物相互の環境への他からの侵入を排除することが可能となる。したがって建築物単体を集合させて街区をつくり、都市のおおきな構成要素となることができるのである。

具体的には、中庭を持った都市型建築にその典型を見ることができ、

中庭型住宅は洋の東西を問わず、世界各地に存在する。いずれも中庭

側に向けて居室が開き、外部に対しては閉鎖的な構えをとる。これによって住戸としての自律性を確保するとともに、方位に依存せず、集住のための集積にも耐える都市型住宅として機能することになる。

周囲に対して閉じることがかえって全体性を保つことにつながるのがある。そのまま汎用性の高い個を実現することにつながっている。

個と全体の幸福な関係の近代における破綻

しかしこうした個がそのまま全体に連なることができるというある意味で幸せな両者の関係は近代以降、破綻の岐路に立たされることになった。建築材料が多様化し、建築物の平面に無数のパラエティが可能となり、さらには生活様式も激変した近代以降、個体間にある種の予定調和的な均質性を求めることは非常に困難になってしまった。

それぞれの建築物が敷地内での効率の極大化を目指す、全体の姿は混沌としたものになってしまう。そのうえ、個々の建築物は自らの個性や独

創性を主張するようになってきた。

一方、全体の側も、「大きな家」とひとくくりにしてしまうには都市機能があまりに多様化してしまった。このような時代にふたたび議論するに足る個と全体の関係を構築し得るのだろうか。全体の構想を宿す個というものが今日でも存在可能なのだろうか。あり得るとしても、それを私たちの日常的な都市空間のなかに見いだすことができるのだろうか。

ふたたび個と全体の関係性を構築する

建築物の側から都市全体へと通じる視点を今日的な日本の文脈で探ると、まずは比較的規模の大きな開発での対応を挙げることができる。

大規模敷地を都市の文脈の中に埋め込むためにはいかにヴォイドの空間を周囲と繋げていくかが重要になるといえる。ただし、大規模開発がそのような問題意識から出発しているとは限らない。むしろ、大きな敷地全体を建築空間として技術的な大架構やアトリウムとして解決しようとしている例も少なくない。超高層

の足もとの大アトリウムというのが20世紀後半の都心部の建築プロトタイプとして一般化しているというのが現状であろう。

建築物単体においても都市や地区的な意味を表現することはできる。たとえば、内部に通る抜けの動線のような個を超えた地区的な空間装置を持つことや、建築物の出隅や正面を強調することによって場所に方位性を持たせることなどのデザインは個を超えた意識の表れである。同質の建築物であっても特徴的な空間ポットキャブライリーを共有し、反復することによって空間的もしくは時間的な連続性を生み出すことができる。

これらのことはごく一般的に都市空間の中で見ることのできる個と全体の関係であるが、ここで重要なのは、個々の建築物を限られた敷地の中で見ている限りにおいても、こうした全体との関係は意識することが可能であり、空間の技法として表現することも可能であるということである。

アルベルティが15世紀のイタリア都市を目の前にして沈思した建築物

単体と都市との関係を、現代に翻案して、薄っぺらでしかし多様な個と無定型に拡がっていく全体との間にひとつながりのある種の論理を見いだすことができる。すると、本連載におけるわれわれの試みもひとつのハードルを越えることになる。ひとつの言語には無数のポットキャブライリーがあるが、それらを配置してひとつのまとまった文脈を形成することが可能なことから、同様のことは都市空間においても可能だと信じたい。そこにこそ修辞（シンタクス）がある。都市空間においても個体を束ねる意味として物語に可能性を開く鍵があるのだろうか。

ソウル北村の韓屋の中庭。ここにも自律する個を支える普遍的な空間がある。



建築が箱に収まらず、都市に展開していくとき、建築を利用する人、まちを行く人の双方にとって意外性のある光景がもたらされる。都市は建築の周囲としてではなく、建築が都市という全体にアプローチするための廊下として機能している。

図1 街路に面した本棚は都市空間の取り込みを前提としている（神田神保町）



図2 映画館が都市を廊下として使っている（池袋）

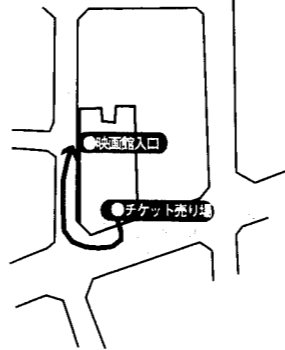
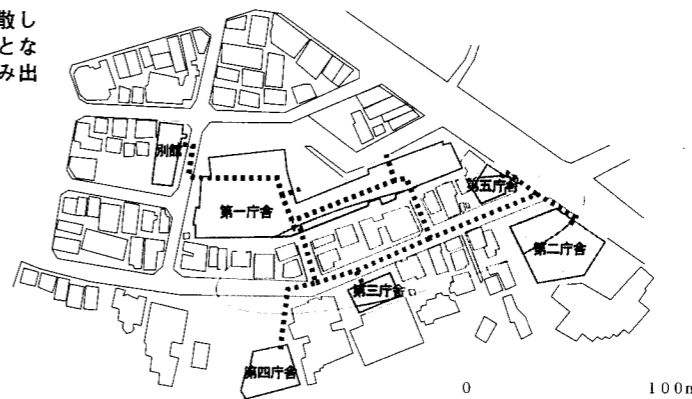


図3 王子本町に分散した北区区庁舎が一体となってまちの光景を生み出している



100m

●建物が自分の周囲の都市を取り込む
何気ない光景の中に建築と都市との接点を感じることがある。例えば神保町の古書店の、書棚を街路に面して設置している姿。それは薬局や八百屋のように商品が店舗から表の街路に溢れ出ているのでも、オープンカフェのようにあからさまに公共空間に進出しているのでもない。あくまで本棚は敷地内にある。しかし本を手にとって読む人々は公道の上に立つ。古書店は書棚という装置でさり気なく都市空間を使う。周囲の都市空間は立ち読みという思わぬアクティビティを鷹揚に受け止めている。

池袋のサンシャイン通りに面するある映画館の光景も同様である。通りから自然に少し内に入った位置にチケット売り場があり、チケットを買った人はそのまま建物の奥の劇場に向かえばよい。しかし、一部のスクリーンに行くためには、一旦通りに出て、戸外の喧騒を経由して、建物側面の奥にある別の小さな入口から入りなおさないといけない。面倒に感じるかも知れない。しかし、チケット購入から映画鑑賞までの連続した行為に都市が介入してく

来る職員、来訪者の姿を頻繁に見かけることになる。通常は業務効率や区民の利便性を高めるといった理由から、分散していた庁舎を一つにまとめること（多くは高層建築によって）が善とされている。しかし、効率や利便性ではない、都市空間がもたらす自由にも価値がある。役所という堅い施設の風通しを良くし、その予定調和空間に刺激をもたらず。程よく賑わう街路を介して、庁舎が身近に感じられる。

る意外性が、映画鑑賞の非日常性を人と都市の双方において高めている
建築が滞留や動線の場として都市空間を取り込んだとき、その建築を利用する人は自ずから都市を掌中に収める。通常は建物の内に隠れて見えないアクティビティが顕在化することで、都市の光景は豊潤さを増す

●分裂した建物群が街路を廊下として使う

通常一つの箱に収まるであろうものが収まっていないという状態が建築が都市との接点を持つ場合によく見られる。機能面からは一体的にあるのが自然なのに何らかの理由で建物としては別々に離れ離れになっている。パチンコホールと景品交換所、医院と門前薬局の関係である。このとき都市は廊下として機能している。

具体的事例を見よう。王子本町にある北区の区庁舎は、23区の中で最も分裂的な形態をとる。その特徴は細長い第一庁舎と第二から第五までの庁舎たちが隣接しているのではなく、間に宅地、街路を挟みこんでいる点である。この間にある街路では、庁舎間を行き

図4 北区役所では、区役所職員が資料を運ぶために街路に出てくる



図5 世田谷線山下駅から小田急線豪徳寺駅を眺める。乗り換える際、人々はこの短い商店街を通り抜けていく



図6 浅草観音裏には見番を中心として、割烹、料亭が分散している

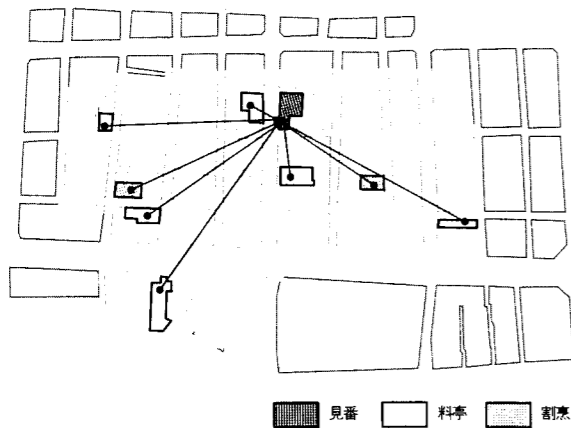


図7 夜、観音裏は仄かな灯りと芸妓の華やかさで色づく



来する職員、来訪者の姿を頻繁に見かけることになる。通常は業務効率や区民の利便性を高めるといった理由から、分散していた庁舎を一つにまとめること（多くは高層建築によって）が善とされている。しかし、効率や利便性ではない、都市空間がもたらす自由にも価値がある。役所という堅い施設の風通しを良くし、その予定調和空間に刺激をもたらず。程よく賑わう街路を介して、庁舎が身近に感じられる。

更なる廊下たちが美しさをも醸し出すのが花街である、浅草寺の裏のまち、観音裏は昼間は目立たないまちである。しかし、日暮れ頃から料亭や割烹、料理屋の灯りが点り、芸妓たちが、まちの中央の見番を経由して、それぞれ呼ばれた店へと歩いて出かけていく。見番から店までの通り道は芸妓たちにとって仕事場への廊下となり、それがまちの風景を彩る。まちに分散した施設が見番を中心に繋がれる伝統的な分業システムが健在で、芸妓自身がそれを顕在化させ、非日常的な美しい風景を生む。

●廊下はまち全体へと広がる
こうした関係が更にまち全体に拡大された典型が、駿河台や三崎町を中心とした神田の大学街であろう。複数の大学や予備校が「x号館」の名の校舎

を散りばめている。まさにまちが各校舎をつなぐ廊下として使用されている。若々しい学生たちの雑然と活気が風景の活力となる。
また、神田では、共有の会議室や機器を集めた核となる施設を設置して、近隣の中小ビルの空き部屋の活用を促進している。都市という廊下を介して、個々の建物の再生が連繫され、まちを活気付けていく。

（中島直人）

●個を超えた呼応が複製を街並みに変える

都市空間に同じものを単に並べて繰り返しただけの複製では、街並みにはなりえない。個の論理を超えて、地域のランドデザインや周辺環境を感じることが、個の想像力を越えた街並みの魅力を生み出す。

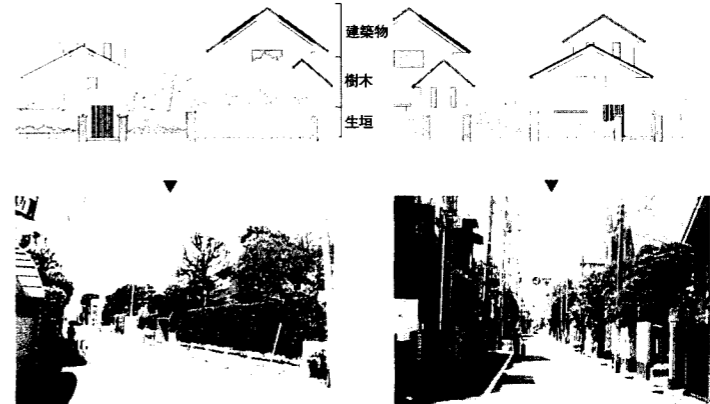
図1 複製は個の論理を超えない



図2 開発当初の空間が残る敷地(左)と建て替わりつつも空間構成を継承する敷地(右)[目白文化村]



図3 東西南北格子状に通る街路に対して、東西街路に南面する敷地には庭と生垣が広がり(左)、南北街路の東西には庭と建物が交互に現れる(右)[西落合]



●「反復」からの都市空間
都市空間を面的に満たす効率的な方法の一つに、空間のプロトタイプを作成してこれを埋め尽くす方法(「反復」)がある。団地や戸建住宅地をはじめ、我が国は、この反復により急速に都市を拡大してきた。しかし、ミニ開発などでよく見られる、余りに同じ形の建築や空間の連続は、統一した街並みであっても、心地よさというより、むしろ冷たさを感じさせる(「複製」)。一方、常盤台や成城など、東京の西部でみかける落ち着いた郊外住宅地は、かつて計画されたものでありながら、複製とは異なる魅力を醸し出す。

●ランド・デザインに従う街並み
戦前期に開発された常盤台(板橋区)は、わが国有数の、美しい街路計画の実現した住宅地であり、とりわけ、中央に並木を持つループ状の環状遊歩道が特徴的である。かつての緑豊かな威風堂々とした街並みは少しずつ姿を変えてしまっているが、興味深いのは、ループ上のカーブに面する敷地では、素材はバラバラながら、生垣や塀、建物の一部がトレースをするかのように

街路に沿ってカーブを描き、街路の形状が浮き立って見える点である。基盤の強いデザインが、街並みをつなぐ力を引き出している(図4)。

また、方角という、より大きなランドデザインへの呼応がまさに適度なリズムを生み出すこともある。耕地整理により規則正しく引かれたグリッドの上に、同規模のゆとりある戸建住宅が広がる西落合(新宿区)では、街路の方角で風景が異なる。東西方向の街路に南面する場合、南側に庭をとり、立派に整った生垣と大木により奥が見えないほど豊かな植栽が並ぶ。逆に、北側で接する場合は、建物は道路に近づき、玄関の意匠が連続して現れる。

これに対して、南北街路に接する敷地では、東西両側の敷地も同様に南側に庭がとられ、そのため、庭と建物とが交互に並ぶリズムある街並みが顔を出す(図3)。

●周囲の「模倣」が生む記憶の継承
周囲や隣接する敷地を意識することで広がる街並みもある。大正後期、田園調布などの先駆けとして開発された分譲住宅地、目白文化村(新宿区)に

図4 地域の中央に回る環状街路のカーブをトレースする住宅の塀や生垣 [常盤台]

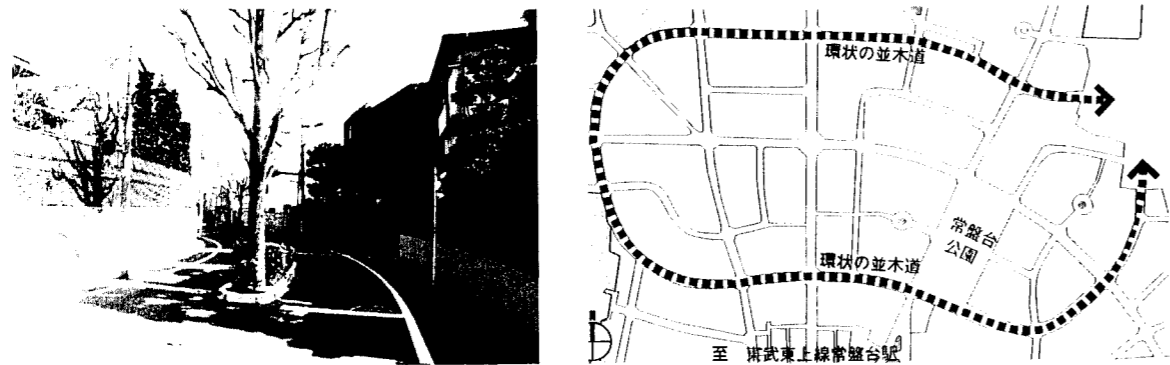


図6 桜並木の広がる街並み(右)と庭木が並木を作り出している通り(左)。街路樹がなくとも、庭木の街路への参加が街並みをつくる [成城]

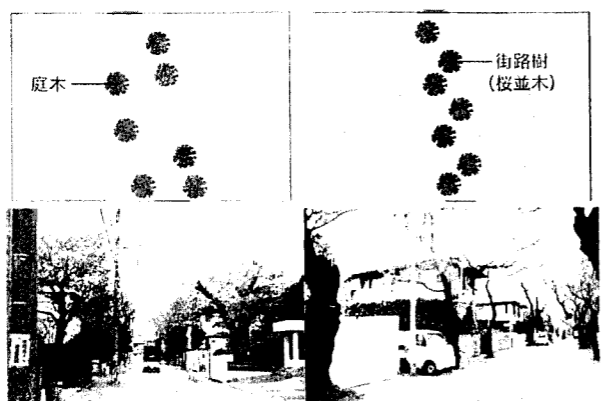


図5 生垣が連続する街並み(上)と、生垣が伝播する街並み(下)[向山]



は、以前、文化住宅とともに低い基壇と開放的な生垣・柵が生み出す街並みが広がっていた。戦災の影響等で、当時の住宅は数棟しか残っていないが、現存する数少ない邸宅地の隣に、新たに建替えたものの、雰囲気や隣に合わせて継承している場所がある。ここでは、街路沿いに前庭をとる配置、低い基壇と開放的な木柵や生垣が連続する街並みの構成、つまり、この地の「記憶」が反復されている(図2)。

都心有数の遊園地、豊島園の南には、「生垣の住宅地」(豊島区向山)がひっそりと佇む。かつて城南文化村と呼ばれたこの地では、どの家にも立派で街並みを創る生垣が整っており、住宅が建て替わってもまとまりのある空間が紡がれている。しかも、この生垣による空気は、城南住宅地のエリアを越えて、少しずつ外側に伝播しており、生垣という要素が街並みの結びつきを広げている(図5)。

●街並みへの想像力が空間を紡ぐ
落ち着いた高級住宅地として名高い成城(世田谷区)は、生垣や街並みへの取組みや眼差しにより育まれた、美しい街である。緩やかなまとまりが心地よいその街並みでは、間口方向、奥行方向、高さ方向に幾重にも景観要素が重なり合っており、過去を見ながら少しずつアレンジが加えられているような「ライブ感」を身にまとう。

特に東側、成城六丁目を成城たらしめる要素の一つに桜並木がある。かつて成城学園が学童とともに植えたと思われるこの並木は、エリアを縦横無尽にかけめぐり、幅員の狭い街路の両脇に交互に植えられ、敷地の緑と混ざり合いながら全体の雰囲気をつくる。一方、西側の成城五丁目には並木が少なく、東側とは違った広々とした街並みが広がっているが、時に、並木の空気が姿を現す通りがある。庭先の樹木があたかも並木であるかのように、敷地の前側に一本ずつ植わっており、街路樹と同様の役目を果たしているのだ。正に、街路樹が移植されたかのような空気を放つ(図6)。

一人で行う努力だけでなく、個の論理を超えた部分に想いを馳せることが、広がりあるまちの空気を育む。それは、個の想像力を遙かに凌駕する創造力となる。(野原卓・中島伸)

図6 吉祥寺の「通り抜け型建築」とまちの現況



吉祥寺は、再開発以前は、零細な店舗が建ち並んでおり、現在もその姿を一部留めている。白地の街区は、もとは大学跡地を中心とする一つの大きな街区であった。区画整理が実施され、街区は分割されたが、それでもなお周辺街区に比べて、その規模が大きい。そのため、建物内に通り抜け街路を設け、周辺街区とスケールを合わせている。現在の吉祥寺のスケール感や高い回遊性は、「通り抜け型建築」による街区分割を最初から想定して街区設計を行う開発手法によってもたらされている。

図5 銀座及び有楽町。上、昭和6年、下、現在（『帝都地形図 第4集』より出典、図版作成）

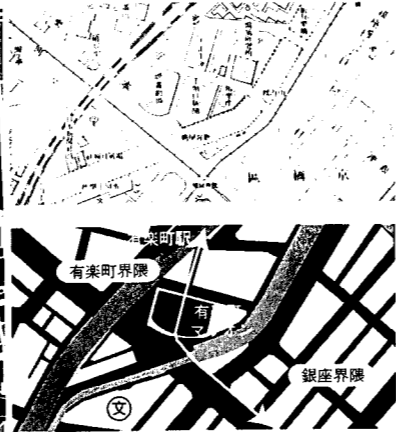


図7 伊勢丹の通り抜け街路とまち



●新旧の空間を融和させる
ここまで述べた「通り抜け型建築」は、街区形状が大きく変更されていない場所に存在したが、これから述べる、街区や建物の規模が周囲のそれと差のある場所では、空間を改変する際に、新旧の空間を融和させるといふ点で

●都市空間を拡張、街路網を担う
このような「通り抜け型建築」を都市の側から見ると、積極的に都市に働きかけているとも、都市からの要請に応えているとも見て取れる。新宿通りに面する紀伊国屋書店は、通り抜け街路と都市空間との接点に小広場や地形差を取り込む内部階段を備えている（図2）。これらは、通り抜け体験に一味を加えているが、ここで注目すべきは、通り抜け街路では、建物自体には用がなくなただ通り抜ける人と、店舗を見まわる人やエレベーターを待つ人など通り抜けとは異なる行為

●従前街路を継承し、都市の纏まりを浮き上がらせる
「通り抜け型建築」に従前の街路が継承されることがある。そこには、既にまちに刻まれた人々の行動の記憶が垣間見える。学校や駅への近道である

「通り抜け型建築」の果たす機能が異なる。吉祥寺駅北口周辺は、昭和40年代より再開発事業が実施されたが、それ以前は、零細な店舗が集まる街区と、それに比べて何倍もの大きさを持つ街区で構成されていた。再開発に際して、この大規模街区を大きく南北に三分割することで中規模街区を形成し、周辺街区の大きさに近づけた。このことは、誘致した大型百貨店の建物を分棟させることにも繋がった（図6）。これもさることながら、その建物内に通り抜け街路を内包させることで、依然として周辺街区より大きい中規模街区を一階レベルでは分割し、街区スケールを周囲に同調させている（図7）。その後、建てられた中規模街区の建物も通り抜け街路を設け、同様の効果をまちにもたらしている。このように「通り抜け型建築」は、新旧の空間の連続感を生み出すのに役立っている。

（後藤健太郎・江口久美）

図1 ①バサージュを模した中野ブロードウェイ、②水辺へと抜ける芝浦のオフィスビル、③地形差が視線を遮断する大塚のマンション、④台地と低地を繋ぐ上野の商業ビル

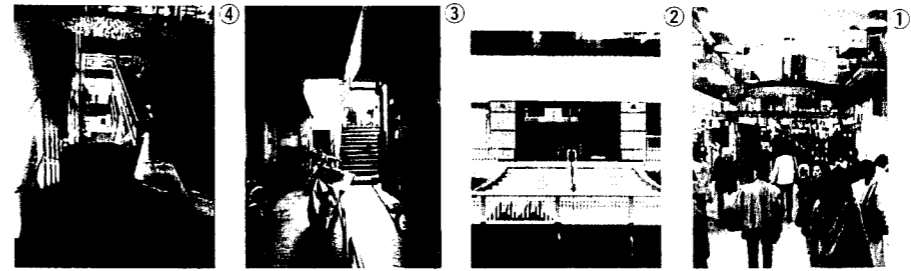


図4 杉大門通り(上)と根元ビル(下)



当ビルはそれぞれの街路に面する独立した二つ建物であったが、現在は一体となり、建物内に街路が設けられている

図3 荒木町の都市構造と通り抜け型建築(新宿区)



図2 紀伊国屋書店新宿通り側(上)通り抜け街路(下)



●通り抜け可能な建築が動線を手繰り寄せ、都市に参加する
街路は本来都市空間を構成するものであるが、建築の内を通り抜け可能な形で設置されると、周囲から動線を手繰り寄せ、建築が都市へ働きかけを始める。

●都市空間を拡張、街路網を担う
このような「通り抜け型建築」を都市の側から見ると、積極的に都市に働きかけているとも、都市からの要請に応えているとも見て取れる。新宿通りに面する紀伊国屋書店は、通り抜け街路と都市空間との接点に小広場や地形差を取り込む内部階段を備えている（図2）。これらは、通り抜け体験に一味を加えているが、ここで注目すべきは、通り抜け街路では、建物自体には用がなくなただ通り抜ける人と、店舗を見まわる人やエレベーターを待つ人など通り抜けとは異なる行為

●従前街路を継承し、都市の纏まりを浮き上がらせる
「通り抜け型建築」に従前の街路が継承されることがある。そこには、既にまちに刻まれた人々の行動の記憶が垣間見える。学校や駅への近道である

●街路を内包する「通り抜け型建築」
建築と都市は街路を通して関係を持つが、建物に通る可能な街路を内包することで、都市と結びつきを強める建築がある。これらを以下「通り抜け型建築」と呼ぶこととする。「通り抜け型建築」は、店舗を連ね集客を目的とするものから、地形差を取り入れ視線を巧みに遮るものまで様々であるが、いずれも外部の人々に開放することとで周囲から動線を手繰り寄せ、建築に都市的要素を持ち込む（図1）。次に、同じく新宿区荒木町を見てみよう（図3）。直線街路の長さに対して脇道のない街路構造と密に建て並ぶ沿道建物がまちを構成しているが、突然出現する「通り抜け型建築」によって、意外にも、並走する別の街路への移動が可能となる（図4）。こうして異なるまちが連絡され、新たな街路網が形成された。ここでは「通り抜け型建築」は、都市構造を映し出すと同時に、その問題を解決するために自らを以て街路網を補い、まちの利便性を高めている。